



Title	『アントニーとクレオパトラ』における建築と理性
Author(s)	中村, 未樹
Citation	大阪大学英米研究. 2021, 45, p. 79-90
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99459">https://hdl.handle.net/11094/99459</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 『アントニーとクレオパトラ』 における建築と理性

中村 未樹

## はじめに

『アントニーとクレオパトラ』(*Antony and Cleopatra* (以下 AC), 1606 年頃制作) をめぐる批評は、本作品におけるパッションの問題をオクタヴィアス (Octavius) とアントニー (Antony) の対照性、あるいはローマとエジプトの差異という点から説明している。例えばジャネット・エイデルマン (Janet Adleman) はオクタヴィアスは “measure” の例であり、アントニーは節制の欠如により自己を失ったと述べる (125)。ジェフリー・マイルズ (Geoffrey Miles) はオクタヴィアスが “Roman constancy” を表し、一方アントニーの理想は “un-Roman and un-Stoic” であると指摘する (173-74, 169)。ジェームズ・ハーシュ (James Hirsh) はローマとエジプトの属性として、それぞれ reason と reason を挙げている (180)<sup>1</sup>。

コッペリア・カーン (Coppélia Kahn) が述べているように、AC に存在するこのような二項対立の構図は厳格なものではなく、曖昧化の可能性も含んでいる (110-11)。本論では、対照性とともな曖昧化の可能性も念頭に置きながら、AC に頻出する建築のイメージとの関連から本作品におけるパッションと理性について考察する。AC 以前には、ペンブルック伯爵夫人 (Countess of Pembroke) の *Antonius* (1592 年)、サミュエル・ダニエル (Samuel Daniel) の *Cleopatra* (1594 年第 1 版) が既にアントニーとクレオパトラ (Cleopatra) について扱っていた。アーデン版テキスト第三版の編者

ジョン・ウィルダース (John Wilders) は、よく知られた主題を採り上げることはシェイクスピアにとって一つの挑戦であったと指摘している (Wilders 1)。作品の個性を打ち出すための手段の一つとして、シェイクスピアは建築の比喩を導入したのではないだろうか。

16 世紀後半以降、イタリアの建築理論がイングランドに流入している。その際紹介された建築家の一人がローマ帝国時代の建築家ウィトルウィウス (Vitruvius) であるが、彼は皇帝アウグストゥス (Augustus) にその書を捧げている。オクタヴィアス (アウグストゥス) による帝政の始まりを描く AC において、シェイクスピアはウィトルウィウスを祖とするイタリアの建築理論を参照したと考えられるのである。以下では、まず 16 世紀後半から 17 世紀初頭のイングランドにおけるイタリアの建築理論の受容について概説する。次に、オクタヴィアスとアントニーの活動と建築との相関関係を確認していく。最後に、クレオパトラの身体と建築の関係性について検討していく。

## I

ルネサンス期のイタリアにおける建築学の隆盛は、古代の建築理論の再評価によって契機付けられた。15 世紀以降、ウィトルウィウスの書 *De Architectura* が注目され、ラテン語による復刻版、イタリア語、フランス語による翻訳が相次いで出版されることになる。このような “the Vitruvian revival” (Yates 20) の中、彼の影響を受けた建築家たち—レオン・バッティスタ・アルベルティ (Leone Battista Alberti)、セバスティアアーノ・セルリオ (Sebastiano Serlio)、アンドレーア・パッラーディオ (Andrea Palladio)—が登場することになる。16 世紀のイングランドに紹介されたのは主にウィトルウィウスとこの三人の建築論である。

1550 年、ノーサンバランド公爵の命を受けたジョン・シュート (John Shute) がイタリアに留学する。セルリオの影響を受けたシュートは、自ら

を “painter and Architecte” と呼び、1563 年に *The First and Chief Groundes of Architecture* を出版する (Summerson 50)。“architect” 及び “architecture” はシュートによる使用が英語での初出である。(OED architect sb 1; architecture sb 1.)

ジョン・ディー (John Dee) はヘンリー・ピリングズリー (Henry Billingsley) によるユークリッドの『原論』の英訳に寄せた序文 *The Mathematicall Preface* (1570) において、建築学に関する議論を始めるにあたりウィトルウィウスとアルベルティを紹介する。

First you see, that I count, here, *Architecture*, among those *Artes Mathematicall*, which are Derived from the Principals . . . I will, herein, craue judgement of two most perfect *Architectes* : the one, being Vitruuius, the Romaine : who did write ten bookes thereof, to the Emperour Augustus (in whose daies our Heauenly Archemaster, was born) : and the other, Leo Baptista Albertus, a Florentine : who also published ten bookes theof. (dijj ; 下線部中村)

この後ディーは二人の著作を引用しながら建築及び建築家について説明しているが、その内容については後述する。さらに、1577 年に出されたウィリアム・ハリソン (William Harrison) の *The Description of England* では、Dee の挙げた二人とセルリオの三人が建築家の模範として引き合いに出されている。

So that if ever curious building did flourish in England, it is in these our years, wherein our workmen excel and in manner comparable in skill with old Vitruvius, Leon Battista, and Serlio. (199)

イングランドに紹介されたイタリアの建築理論は文学作家たちの関心も集

めていくことになる。例えば、サー・フィリップ・シドニー (Sir Philip Sidney) は *The Countesse of Pembrokes Arcadia* において “Architecture” という言葉を使用している (85)。1580 年代以降の文学作品には建築関連の用語が度々見受けられる。その一例がベン・ジョンソン (Ben Jonson) であり、彼はウィトルウィウスの建築論を読んでいた。また、イニゴ・ジョーンズ (Inigo Jones) はセルリオ、そしてパツラーディオの影響を受けており、舞台設計においてもイタリアの建築理論が影響を与えることになる。AC における建築のイメージの使用はこのような文化的環境に根差しており、シェイクスピアは建築の比喩を通じてパッションの問題を検討しているのである。

## II

ここからは AC における建築のイメージを、arch、pillar、design、rule、square という五つの語に注目しながら考察していく。建造物、その構成部分、図面、そして器具を意味するこれらの語の分析を通じて、ローマの活動が建築的な意義を持つことを明らかにしたい。劇の冒頭、アレクサンドリアでクレオパトラと怠惰な日々を過ごすアントニーは次のように言う。

Let Rome in Tiber melt and the wide arch  
Of the ranged empire fall! (1.1.35-36)<sup>2</sup>

ニュー・ケンブリッジ版テキストの注によれば、ローマ市を要石としてその左右に征服された市・属州が配置されて出来た門がここで想定されている。〈ローマ＝建造物〉という関係が読みの手掛かりとして提示されているのである。なお、ペンギン版テキストの編者エムリス・ジョーンズ (Emrys Jones) は凱旋門が想像されていると指摘している (193)。本作品における凱旋式のイメージについては最後に検討する。

〈ローマ＝建造物〉という比喩を念頭においた場合、ローマの拡大と発展

は門を作っていくような建築活動とみなすことが出来る。オクタヴィアスとの同盟締結が決まったアントニーは“design”という語を使用している。

[A]nd from this hour

The heart of brothers govern in our loves

And sway our great designs! (2.2.156-58)

またオクタヴィアスは自殺したアントニーを“thou, my brother, my competitor / In top of all design” (5.1.42-43) と呼ぶ。二人が共に使う“design”という語は、*OED* によれば当初は“a mental plan”、つまり心の中において想定される計画、目的という意味を持ち、後に“a plan in art”、つまり図面、設計図という意味を持つことになる<sup>3</sup>。このことを踏まえた場合、ローマの活動は「心の中で目的を決める／図面を作る、そして目的を遂行していく／図面通りに施工していく」ことであると敷衍できる。ローマによる世界帝国建設は、図面作成、施工という建築的な手続きなのである。

当時の建築理論もこのプロセスを述べていた。デーは先述した序文において、アルベルティによる建築家の定義、また建築における二つの行為に関する説明を紹介している。

But I will appoint the Architect to be that man, who hath the skill (by a certaine and meruailous meanes and way,) both in minde and Imagination to determine and also in worke to finish . . . The whole Feate of Architecture in building, consisteth in Lineamentes, and in Framyng. And the whole power and skill of Lineamentes, tendeth to this: that the right and absolute way may he had, of Coptyng and ioyning Lines and angles: bu which, the face of the buildyng or frame, may be comprehended and concluded. And it is the property of Lineamentes, to prescribe vnto buildynges and eury part of them, an apt place, & certaine nuber: a worthy maner, and semely order:

that, so, y whole forme and figure of the building, may rest in the very Lineamentes. And we may prescribe in mynde and imagination the whole formes . . . Lineamente, shalbe the certaine and constant prescribing, conceiued in mynde. . . . (diiij ; 下線部中村)

建築家は心の中において目的を決め、実地においてそれを完成させるのであり、この前半の作業が“lineamente”、つまり図面作成である。アルベルティは建築活動を心の中での目的決定・図面作り（design の作成）と、それを実行・実現すること（Framyng；組立て）の二種類に区分している。アントニーとオクタヴィアスの計画はこの二つの手順に従っている。

また、ファイロ（Philo）のアントニーに対する批判、“Take but good note, and you shall see in him/The triple pillar of the world transformed/Into a strumpet’s fool”（1.1.11-13）が示しているように、アントニーとオクタヴィアスは“pillar”という主たる構成部となって〈ローマ＝建造物〉を支えなければならない。

さらに、ディーは建築家の素養についてウイトルウィウスの見解を引用しながら論じている。

An Architect (sayth he) ought to vnderstand Languages, to be skillfull of Painting, well instructed in Geometrie . . . And Geometrie, geueth to Architecture many helpes: and first teacheth the Vse of the Rule, and the Cumpasse. . . (diiij)

建築家は幾何学の知識を習得し、定規（Rule）やコンパスの使用法を学んでおかなければならない。建築は“the pereles Princesse, Mathematica”の“a naturall Subiect”（ibid.）、つまり数学の下位学問なのであり、幾何学の知識がその基礎となる。そして、“lineamente”の段階においては幾何学理論に基づいて器具を正しく使うことが重要となる。前に引用した“ranged empire”

における“ranged”という語は orderly ranged の意味であり、幾何学的秩序性が含蓄されている。

重要なのは、AC では幾何学的秩序性が人物たちの行動と品格を表す指標となっていることである。自分の妻となったオクテーヴィア (Octavia) に対し、アントニーは次のように誓っている – “I have not kept my square, but that to come / Shall all be done by th’rule.” (2.3.6-7)。アントニーの改心は、定規と物差しをそれぞれ意味する square、rule を援用して語られており、建築・幾何学と行為・品格との関係がここで明らかになる。ローマにおける建築活動は、幾何学的秩序とともに道徳的な秩序も必要とするのである<sup>4</sup>。

この相関関係については、*The Faerie Queene* における一節も紹介しておこう。“‘But temperaunce’ (said he) ‘with golden squire / Betwixt them both can measure out a meane’ (II.I.LVIII)。ここでは黄金の定規が節制という道徳的規則性を象徴している。また、ピーター・ブリューゲル (Peter Brueghel) の絵 *Temperantia* (節制; 1560年) においては直角定規が象徴として絵の中に取り入れられている。アキッレ・ボッチ (Achille Bocchii) 作の図像では王座に座る人物に天使が定規を渡しており、これは節制を求めるメッセージとなっている (Bocchi symbol LXVII)。

クレオパトラは、オクタヴィアスの凱旋式において自分が捕虜として連れられていく様を想像して、“Mechanic slaves / With greasy aprons, rules, and hammers shall uplift us to the view.” (5.2.208-10) と述べている。定規を持ったローマの職人たちは、道徳的・幾何学的秩序を逸脱する彼女を弾劾しているかのようである。

オクタヴィアスとアントニーの対照性は建築の観点から語ることができる。ローマの「柱」として着実に、計画的に領地拡大を進め、酒席においても品行方正さを失うことのない理性的なオクタヴィアス。それに対して、アントニーはファイロが指摘するように「柱」としての役割を放棄し、また、劇冒頭のファイロの言葉 “Nay, but this dotage of our general’s / O’erflows the measure” (1.1.1-2) が端的に表すように、アントニーはその過剰な愛におい

て幾何学的・道徳的な秩序性を違反していく<sup>5</sup>。本論ではオクタヴィアスの行動を建築的なもの、アントニーの放埒な行動を反・建築的なものと呼ぶことにしたい。

アントニーの反・建築的な志向性を顕著に表しているのは、彼の言葉に暗示されている建造物の崩壊のイメージである。度々言及している台詞“the wide arch / Of the ranged empire fall”は、門の崩壊を想起させる。また、その後の彼の言葉“in which I bind, / On pain of punishment, the world to weat / We stand up peerless” (1.1.40-42)における“peerless”は、“pier・less”と聞くことが出来たかもしれない。その場合、「支柱なく立つ」という意味になり建物の崩壊が予示されている。なお、シェイクスピアの歴史劇 *The Second Part of King Henry VI* においても“peer=pier”の地口が使用されている<sup>6</sup>。

エジプトにおいては反・建築的生活を送るアントニーであるが、ローマに戻った際には再びローマ的・建築的生き方へと回帰していく。アントニーを特徴づけるのはこのような揺れである。先に引用したオクタヴィアスとの同盟締結を祝う台詞の“design”という語が示しているように、ローマに戻るやいなやアントニーはローマの図面設計を口にしてしているのである。この時点では彼はオクタヴィアスとの友好的な領地分配に基づいたローマの図を想定している。

ここで、アントニーとオクタヴィアスを「つなぎ合わせる」女性オクテヴィアが“cement” (3.2.29) と呼ばれていることにも注目したい。男性中心社会のローマにおいて、女性は柱のように〈ローマ=建造物〉の主たる構成部にはならず、補助的役割のみ付与される。しかし、この同盟の先行きをあやぶむイノバーバス (Enobarbus) の言葉 (2.6.118-20) が示しているように、「セメント」は接着のみならず分裂をも契機づける起点、構造全体の存続を左右する力となりえる<sup>7</sup>。

オクタヴィアスの同盟条約の違反、及びオクテヴィアの離縁によって、オクタヴィアスとアントニーが想定したデザインは実現されずに終わる。そ

して、劇の後半ではアントニーは崩壊する建造物として表されていくことになる。海戦で惨敗したアントニーをスケアラス (Scarus) は “[t]he noble ruin of her [Cleopatra’s] magic” (3.10.18) と呼ぶ。力と名誉を失ったアントニーは、わずかな形骸のみが残る廃墟として存在するのである。これが彼の反・建築的な生き方の帰結であると言えるだろう。また、アントニー自殺の報を聞いたオクタヴィアスの言葉 – “The Breaking of so great a thing should make / A greater crack” (5.1.14-15) – は廃墟が崩れ落ちていく音を観客に意識させる。

対エジプト戦の勝利によって、オクタヴィアスは、自らを “the universal landlord” (3.13.73)、つまり「唯一の地主」とするローマ帝国という建造物の完成を目前に見据えている。一方で、アントニーは帝国建設の作業から外れ、崩壊した建造物となった。二人のこのような運命の分岐は、建築的・理性的であるか否かにかかっていたと言える。

アントニーとクレオパトラは共に、来るべきオクタヴィアスのローマ凱旋における自分たちの惨めな姿を思い描いている (4.1.71-77, 5.2.51-56)。コッペリア・カーンは AC では凱旋式のイメージが反復されることで、凱旋式があたかも現実に行われたことのように私たちの想像上に浮かび上がってくると指摘している (127)。なお、1604年のジェームズ1世 (James I) のロンドン入城の凱旋式においては、ロンドンに七つの凱旋門が建てられている。そのうちの一つ、Fenchurch に建てられた凱旋門には、この制作に携わったスティーブン・ハリソン (Stephen Harrison) による絵を参考にするならば、門の上方に “Londinivm” と記されており、ジェームズの治世をローマ帝国統治下のブリテンと結び付けようとする傾向が窺える<sup>8</sup>。シェイクスピアは、劇作家ジョンソンとトマス・デッカー (Thomas Dekker) が携わったこの凱旋式を実際に見物したのかもしれない。

クレオパトラは死んだアントニーを想って次のように述べている – “His [Antony’s] legs bestrid the ocean; his reared arm / Crested the world” (5.2.81-82)。ベヴィントン、ウィルダース、そしてオックスフォード版テキストの編

者マイケル・ニール (Michael Neill) はロードスに聳え立っていた巨人像のイメージをこの箇所を読み取っている。大地を股にかけた巨大なアントニーの姿は、その外観、そして劇後半におけるアントニーの建造物化という展開も考慮した場合、巨大な凱旋門に見えてくる。そのように考えるならば、凱旋するオクタヴィアスを眼下に見下ろし、その卑小さを嘲笑するアントニーの姿が目浮かんでくることになる。イメージの次元において二人の争いはまだ続行しているのである<sup>9</sup>。

建造物化という現象はクレオパトラについても見られる。彼女は自殺の前に自らの身体を建造物に例え、その崩壊を宣言している – “This mortal house I’ll ruin.” (5.2.50)。また、その後の台詞も注目に値する。

My resolution’s placed, and I have nothing  
Of woman in me. Now from head to foot  
I am marble-constant; now the fleeting moon  
No planet is of mine. (5.2.237-40)

ニールはクレオパトラが自分の身体が大理石に変化したと想像しているのかもしれないと注釈で指摘している。アントニーとともに道徳的・幾何学的秩序に対してきたクレオパトラが、ここでは建造物として自らを捉えているのである。マイルズはクレオパトラが “mutability” の象徴でありつつ、「彼女らしい」という点では一貫性を持ち、その自殺においても “constancy” を主張するという点において反ストア的志向とストア的志向を融合していると述べている (186-88)。この両面性は、反建築的でありつつ建造物というクレオパトラの在り方とも関連付けられる。

〈身体=建造物〉のイメージは、〈ローマ=建造物〉のイメージに対抗するものとなる。この身体性の問題は、AC が上演された劇場-グローブ座あるいはブラックフライアーズ劇場という建造物 – と役者の身体の関わり合いと結び付けながら検討していく必要がある。この点については別稿において議

論することにした。

\*本稿は、日本シェイクスピア協会第46回シェイクスピア学会（平成19年10月7日於早稲田大学文学部）におけるセミナー「『アントニーとクレオパトラ』を読む」における口頭発表（『アントニーとクレオパトラ』における建築とローマ）に加筆修正を加えたものである。

#### 注

- 1 ACにおける二項対立の図式については、他には Deats 3-12、Snyder を参照。
- 2 テキストからの引用は全てデイヴィッド・ベビントン（David Bevington）編集のニュー・ケンブリッジ版による。
- 3 後者の初出は1638年である（*OED design sb* 1, II）。
- 4 マイルズは“geometrical rigidity”（173）をローマの特徴の一つに挙げている。ローマの軍隊を指す言葉“the brave squares of war”（3.11.40）についても、規律という意味での秩序性を読み込める。
- 5 劇の材源であるプルタルコス『英雄伝』もアントニーのパッションに言及している。1579年に出版されたトマス・ノース（Thomas North）の英訳では“irascible and concupiscible passion”（Bullough 454-55）と書かれている。
- 6 ニュー・ケンブリッジ版テキスト編者のマイケル・ハタウェイ（Michael Hattaway）によればグロスター公爵（Duke of Gloucester）の“Brave peers of England, pillars of the state”（1.1.72）では“peers = piers”という地口になっている。
- 7 古代ローマにおけるコンクリート技術についてはウォード・パーキンズ 第3章を参照。
- 8 この凱旋門については Turner 133-52 を参照。
- 9 セミナー・メンバーの三浦誉史加先生からは“legs”が“pillar”のパロディになっているとの指摘を頂いたが、その場合、過去時制という点も踏まえれば、この台詞はローマ帝国の「柱」としてかつて君臨したアントニーへの追悼として読むことができる。

#### 引用文献

- Adelman, Janet. *The Common Liar: An Essay on Antony and Cleopatra*. Yale UP, 1973.
- Bocchii Bonon, Achillis. *Symbolicarum Quaestionum, de Univerfo Genere, Quas Ferio Ludebat, Libri Quinque*. Apud Societatem Typographiae Bononienfis, 1574.
- Bullough, Geoffrey. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. Vol.5, Routledge, 1966.

- Deats, Sara Munson. "Shakespeare's Anamorphic Drama : A Survey of *Antony and Cleopatra* in Criticism, on Stage, and on Screen." *Antony and Cleopatra : New Critical Essays*, edited by Sara Munson Deats, Routledge, 2005, pp.1-91.
- Dee, John. *The Mathematical Preface to the Elements of Geometrie of Euclid of Megara (1570)*. Science History, 1975.
- Harrison, William. *The Description of England : the Classic Contemporary Account of Tudor Social Life*. Edited by Georges Edelen, Dover Publications, 1994.
- Heinemann, Margot. "'Let Rome in Tiber Melt' : Order and Disorder in *Antony and Cleopatra*." *Antony and Cleopatra : Contemporary Critical Essays*, edited by John Drakakis, Macmillan, 1994, pp.166-81.
- Hirsh, James. "Rome and Egypt in *Antony and Cleopatra* and in Criticism of the Play." *Antony and Cleopatra : New Critical Essays*, edited by Sara Munson Deats, Routledge, 2005, pp.175-91.
- Kahn, Coppélia. *Roman Shakespeare : Warriors, Wounds, and Women*. Routledge, 1997.
- Miles, Geoffrey. *Shakespeare and the Constant Romans*. Oxford UP, 1996.
- Shakespeare, William. *Anthony and Cleopatra*. Edited by Michael Neill, Oxford UP, 1994.
- . *Antony and Cleopatra*. Edited by David Bevington, Cambridge UP, 2005.
- . *Antony and Cleopatra*. Edited by Emrys Jones, Penguin, 1977.
- . *Antony and Cleopatra*. Edited by John Wilders, Thomson Learning, 1995.
- . *The Second Part of King Henry VI*. Edited by Michael Hattaway, Cambridge UP, 1991.
- Sidney, Sir Philip. *The Countesse of Pembrokes Arcadia. The Prose Works of Sir Philip Sidne*, edited by Albert Feuillerat, vol.1, Cambridge UP, 1962.
- Snyder, Susan. "Patterns of Motion in *Antony and Cleopatra*." *Shakespeare Survey*, vol.33, 1980, pp.113-22.
- Spenser, Edmund. *The Faerie Queen*. Vol.1, Dent, 1966.
- Summerson, John. *Architecture in Britain 1530-1830*. Yale UP, 1993.
- Turner, Henry S. *The English Renaissance Stage : Geometry, Poetics, and the Practical Spatial Arts 1580-1630*. Oxford UP, 2006.
- Wilders, John. Introduction. *Antony and Cleopatra*, edited by John Wilders, Thomson Learning, 2006, pp.1-84.
- Yates, Frances A. *Theatre of the World*. U of Chicago P, 1969.
- ウォード・パーキンズ、ジョン・ブライアン。『ローマ建築』桐敷真二郎訳、本の友社、1996年。